

### [3] 課題別学習における実践

#### (1) 本年度の取り組み

中学部では、昨年度より基礎学力（国・数）を基にグループを編成し、週に3時間課題別学習を行っている。コミュニケーションに関して課題別学習でつきたい力は、読む・聞く力（理解力）と話す・書く力（表現力）である。その基礎となるのが、基礎学力の習得であると考えている。

グルーピングは、習熟度に合わせた学力の定着と向上、及び、同じ課題にせまる中での競争意識や意欲を高めることのできるよう工夫して編成した。また、意見交換やコミュニケーションの拡がり小集団の中でこそ期待できるのではないかと考えた。その上で、基礎学力を実際の生活に生かすために、場の設定や題材選びにも工夫して、各々のグループが取り組んでいる。ただし、生徒の個性や課題の内容によっては個別の対応をする方がより効果的な場合もあるので、グループといっても必ずしも複数メンバーというわけではない。

#### (2) 生徒の実態と主な指導内容

グループ	生徒氏名	基礎学力のおよその実態	主な指導内容
A1	A男（中1） N男（中1） Z男（中2） I男（中2） E男（中2） M子（中2） 〈小谷〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小1～3年程度の漢字の読み書きはほぼ習得（A、Eは小6程度）</li> <li>・簡単な文章の内容は理解できる。</li> <li>・助詞が正しく使えない。（A、N）</li> <li>・2～3位数の加法、1～2位数の減法、1位数の乗法ができる。</li> <li>・簡単な文章題ならできる生徒もいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小3～6年の漢字の読み書きの定着</li> <li>・辞書の使い方の習得</li> <li>・文部省4つ星本〈数学〉の活用（3位数までの数の大小、2位数までの加減の定着）</li> <li>・長さ・量・重さ・時計・暦・図や表 お金の計算（実生活に即して）</li> </ul>
A2	H男（中1） G男（中1） O男（中2） R子（中2） U男（中3） Y子（中3） 〈岸田、河田〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小1年程度の漢字の読み書きは習得</li> <li>・身近で馴染みのある漢字は読めるが筆順は不正確である。</li> <li>・具体物を使って、10までの加減法がほぼできる。</li> <li>・時計は分針まで読める生徒もいる。</li> <li>・金種が異なると計算が困難になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小1～2年の漢字の読み書きの定着</li> <li>・作文や手紙、招待状（漢字の使用）</li> <li>・友だちや先生の話聞く態度と力（静かに聞き、意見や感想を言う）</li> <li>・100までの加減法 1000円までのお金の支払い</li> <li>・時間（分）、暦、長さ、重さ、量</li> </ul>
A3	S男（中1） M男（中1） H子（中3） K男（中3） T男（中3） 〈鹿田、出脇〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平仮名の50音の読み書きはほぼできるが、片仮名は不正確</li> <li>・「お」「を」、「え」「へ」の使い分けや濁音・半濁音・促音等不正確</li> <li>・小1年程度の身近な漢字は、読み書きできるものもある。</li> <li>・漢字、視写は不正確で乱雑</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平仮名、片仮名を正しく書く。</li> <li>・身近な漢字の習得（自分の名前、住所、学校名、日付、曜日等）</li> <li>・主述の整った文を書く、話す。（自己紹介、おつかい、日記等）</li> <li>・時計、お金、量、形の基礎</li> <li>・人にわかるように話す。・口の体操</li> </ul>

B	F男(中2)    〈松下〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・50音の平仮名はほぼ読み書きできる。(拾い読み)</li> <li>・小1年程度の漢字の視写はできるが、一人では書けない。</li> <li>・80までの数唱ができる。一人で書けるのは8まで。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・100までの数(1対1対応、数字の読み書き、大小関係)</li> <li>・時計、お金と買い物(1000円まで)</li> <li>・文字指導(絵本、絵、カード)</li> <li>・要求語の増加</li> <li>・YES・NO及び選択肢による意思表示</li> </ul>
C <sub>1</sub>	L男(中1)    〈田村〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平仮名(50音全部)、身近な片仮名や漢字を読むことができる。</li> <li>・なぞり書き(筆順は不正確)をする。</li> <li>・ワープロで平仮名の言葉を打つ。</li> <li>・30までの数唱、10までの数字の判別ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はっきりとした返事、あいさつ</li> <li>・音読、読書</li> <li>・語彙を増やす(ワープロで正確に)</li> <li>・10までの数(1対1対応、大小)</li> <li>・作業活動の仕上げ、補充(個別指導の徹底、意欲や成就感を持たせる)</li> </ul>
C <sub>2</sub>	B男(中2) C男(中2)   〈市谷〉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読める平仮名がいくつかある。</li> <li>・一人で書ける平仮名もある。</li> <li>・何度も聞いた物語は、話を覚える。</li> <li>・絵を見て、名前を言うことができる。</li> <li>・20までの数唱、5までの数字の判別ができる。1対1対応は困難</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読める平仮名を増やす。(絵カード)</li> <li>・話を聞いて内容を理解する。(読み聞かせ、紙芝居、ビデオ視聴)</li> <li>・10までの数の理解(具体物を使用)</li> <li>・大きな声で話したり歌ったりする。</li> <li>・形の認知(パズル)</li> </ul>

### (3) グループ編成上の課題

グループごとに実態に応じた独自の工夫、合同や学級とはまた異なる学習展開などがなされた。Aグループにとっては、同じ課題に取り組む充実感やコミュニケーションの広がりが得られた。B・Cグループにおいては、個別の対応によって着実に力をつけてきているように思う。

しかし、2年間の実践の上で、「日々の継続」という点において大きな課題を残すことになった。つまり、基礎学力の習得を図り、

- ・生活に生かす
- ・生活単元学習と関わって発展させる
- ・家庭での課題学習として充実させる

 ためには、

- ・すぐに対応する
- ・具体的な実践につなげる
- ・毎日継続する

 ことが大切ではないか。そのためには、



A1 教科書をもとにして



A2 玉ねぎの重さを計る

担任との関わりがポイントになる。課題別学習の設定場面、生活単元学習とのつながりなど、教育課程とも関わって、現在模索は続いている。

#### (4) 実践事例

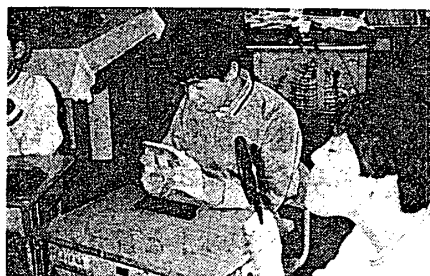
##### ① A<sub>3</sub>グループ

中3-3名、中1-2名、計5名からなるこのグループは、3名はことばによるやりとりはかなりスムーズにできるが、他の2名と同様、表記という点ではひらがな、カタカナでまだ正確に書き表せない生徒が集まっている。また、中学部の生徒の中でことばが不明瞭で言語養訓の対象にあげられている2名がこのグループに属している。

そこで、発声発語の訓練を学習の始めに取り組むこと、できるだけ生活に密着した内容（生活単元学習や季節、行事にも関連を持たせたもの）を取り上げる。また具体的な体験をさせながら、それを発表したり文に表現することによって基礎的な力をつける。この2本柱をたてて学習を組み立てている。

##### a 「口の体操」と発声時間を伸ばす取り組み

言語養訓の指導を受けている言語療法士の先生より、発声発語器官の筋肉の低下を指摘され勧められた「口の体操」(注3)を学習の始めに取り組んでいる。「口の体操」は、深呼吸→あごの運動2種類→唇の運動2種類→舌の運動4種類からなる。



口の体操をしているM男とH子

下あごの運動、頬の運動、舌先を唇に沿って動かす運動などはかなり難しく、まだできない生徒もあるが、10月以降は手鏡を見ながら自分で意識してこの「口の体操」をするようにさせたところ、少しずつではあるが意欲的に取り組めるようになってきている。

また、2学期からの取り組みで、発声時間を長くする活動も取り入れた。その結果、最初4秒しか続かなかったK男が8秒、1番長く9秒続いたS男が14秒と少しずつだが伸びてきており、呼気のコントロールを意識し始めたところなので、「口の体操」と共に継続して取り組んでいきたい。

##### b 具体的な体験を通した基礎的な力の育成 ～長さ調べの学習より～

右に挙げたのは、長さ調べの学習の導入段階で、自分の身長と同じ長さの紙テープを切り取り5人で比べた時のことを、学習後作文に書かせたものである。M男は発音することばも、それを表記したものもこのようになかなか誤っているが、4月当初に比べると本人なりにはていねいに書こうとしている様子が伺われる。この長さ調べは運動会の行われる9月に扱い、「100m走」「50m走」など日頃口にしている長さの単位について学習し、実際に色々なものの長さを測ったり、指定された長さの線を引いたりする活動を体験させた上で、それを作文にして発表させた。具体的な活動を通しての取り組みなので、少しは抵抗が軽減され、取り組みやすかったのではないと思われる。

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	ゆ	よ	ゆ	よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	わ	わ	わ	わ

M男の作文より

今後も、生徒が取り組みやすい内容を取り上げ、生きた力となるような学習を展開していきたいと考えている。

## ② C<sub>1</sub>グループの実践

L男一人のグループである。担任が担当していることから、他の学習や家庭との連携が取りやすく個に応じた対応ができる。L男は、指示に的確に従ったり文字や言葉を覚えたりすることは充分できるので、理解する力もあるものと思われる。しかし、普段の生活の中では、ウケをねらってなまけたり真剣にすべき時に冗談めかしたりして、力が発揮されないことがあまりにも多い。持てる力を発揮させ、より力を高めていくには、まず、本人の自覚と意欲をうながすことが大きな課題となる。

また、表現する力については、基本的なこと（返事、あいさつ）が相手に聞こえるように、分かるようにという点から始めている。握力が弱く、なぞり書き程度しかできないが、ワープロを打つことには大変意欲的で、大好きなぶらんこをさしおいて取り組んでいる。L男の場合、現在の段階では、友だちが回りにいるとそちらに気が向いてしまって集中できず、上記のような行動パターンになることが多いので、基礎学力の定着と習得を図るためには、個別の対応が効果的である。

### a はっきりと話すこと（返事、あいさつ、音読など）

二人きりの学習にもかかわらず、課題別学習の時間は大きな声で返事やあいさつをする。大好きな絵本を持ち出して30ページ近くもある物語を一人で大きな声を出して読む。途中わからない漢字があると、「うーん、うーん。」とうなって指さしをするので、「何ですか？何が言いたいのかわかりません。言って下さい。」と言うと、「わかりません。教えてください。」と文字を指さす。読み方を教えると、口まねをして次へ進む。担当者としては、どうしてこれが全体の場でできないのかと残念な気持ちになるとともに、L男の持てる力を再認識し、地道な意欲の積み上げと、知識の拡がりを確実なものにしていくことの重要性を感じ、大切にしたい個別の時間となっていると確信している。

### b 語彙を増やし、正しく使うこと（ワープロ）

CMの言葉、テレビの題名などから始まり、動物や身の回りの物、そして人の名前などを思い浮かぶままにワープロで打っていく。本当に楽しそうに次から次へと打ち、自分で打った言葉を読み返しては同意を求めてくる。「そうだね。〇〇も見たね。」など、話をふくらませてやると、また、次の言葉を打つ。現在は単語の羅列だが、ひとつひとつの言葉が思い浮かぶ過程には、L男の気持ちに流れがある。以前に覚えた順番、音の響き、好きな順などL男らしい流れがあるらしく、声かけや話の引き



ワープロを打つL男

出しを試みても知らぬ顔をしていることもある。しかし、一度気持ちが乗ると素直に言葉が出てくる。この気持ちを大切に見守り、楽しませながら、本年度は言葉の表出に努めさせたい。なお、単語の羅列の中に二語文が含まれたこともあった。

◎らあめん たへたい (ラーメン食べたい)

◎きのしたくん たいすき (木下君、大好き)

◎濁点の打ち方は、マスターしていない。

話し言葉でも「」や「」をまちがえて使う。

### ③ C<sub>2</sub>グループの実践

このグループは、ひらがなの表記や読むことがむずかしいB男・C男で構成されている。ただ、2人とも、「おはなし」に対する関心や興味は高く、その読み語りをしてもらえる課題別学習の時間を楽しみにしている。特にC男については、小さい頃から母親に、たくさんの絵本を読み語ってもらってきた経緯もあり、文字は読めなくても、おはなしを覚えて、絵本をみてそのストーリーを正確に語ってくれている。それだけに、親の想いとしても、せめて文字（ひらがな）が読めるまでの指導を学校に求めるのも無理からぬことであり、文字の基盤を耕すという視点からの取り組みを始めたところである。もっとも、表記文字に対する発達については順序だてた学習の展開なしには、その促進はないことはいうまでもない。そこで短兵急な文字への接近は極力さけ、現状の興味・関心から出発し、自然な形で音読できるようになる点を留意した。

また、2名のグループとはいえ、個別にどのような課題をもっているか詳細な検討を行い指導方針をたてた。



絵カードによる学習をするB男・C男

#### ㊤ 絵カードに描かれた絵と文字（ひらがな）のマッチングを通して

絵カードの絵をみて答えさせ、そこに書いてある文字にも注視させてみた。すぐさま文字が読めるようになる訳ではないが、一字ずつ抑えて言っているうちに、段々と文字に対する関心が高まった。

#### ㊤ 絵カードに示された絵と関係の歌を大きな声で唄う

例えば「ぞう」の絵カードを示すと、多くの歌を知っているC男のリードで「象さん、象さん…」と歌い出すといった具合である。これも、日常生活の中で小さな声で、何をいっているのかよくわからない発声をしているB男の実態から、大きな声で歌うことで呼吸法を身につけさせるとともに、発声上の発達を促すことに留意したのである。その結果はB男によい結果をもたらしはじめている。

#### ㊤ 絵カードの「おじいさん」と関連づけて「昔ばなし」などの紙芝居の読み聞かせへ

おはなしの好きな二人にとって、このひとは、一番集中して聞き、その内容を一字一句まちがえることなく覚えてくれるようになった。特にC男の場合は顕著な発達の軌跡を見せてきている。

こうした取り組みの中で、二人は、物語りを覚えるだけでなく文字に対する関心を高め、50音を一字ずつ書いたカードをみて、自主的に読む動きもでてきた。特にC男は、ひらがなで13文字は確実に読めるようになり、数字についても「10」までの数のうち「7」を除いて読みとることが可能となった。また、B男については、当初、小さな声での「一語」発表であったものが、我々にもはっきりと解る「二語文・三語文」の発表がみられるようになってきた。

「文字」の理解が生活と結びつかないものであれば、それは有効なものとはいえないと思うが、この関心の拡がりの中で生き生きと生活し、コミュニケーションを楽しむことが出来るならば、その意義は大きいといえるのではないだろうか。